

所 報

No. 39

佐賀県教育センター

佐賀県佐賀郡大和町川上

TEL 0952-62-5211

もくじ

○ 経師易遇、人師難遇	1
○ 昭和60年度研究発表会報告・教育実践・研究記録入選者の声	2
○ 研修講座実施状況と受講者の声・受講者への提言	4
○ 中学校(図形・確率・統計)講座の講義概要「私の数学教育」	6
○ 指導のチェックポイント——高校国語・小学校理科——	8
○ 「子どもを生かす教育相談」の出版に当たって	11
○ 私のすすめる一冊の本	12
○ 昭和60年度 教育実践・研究記録募集のお知らせ	

経師易遇、人師難遇

佐賀県教育センター所長 乗 田 徳次郎



時は秋、学校では学習に運動にと、もっとも充実した時期であります。当センターも4期の講座が開講し活気に満ちております。本年度の第1期から第3期までの受講の先生方の感想文をその都度読ませていただきました。最初に、先生方の研修にける熱意とその真摯さに心から敬意をはらいます。と同時に、先生方が常に現場での教育実践・生徒とのかかわりを意識しながら受講される姿勢に大きな安堵感をいただきました。どのような職業においても研修の重要性は強調されます。特に、子どもの教育にたずさわっている教師にとっての研修の重要性は、他と比肩することができない重さをもっていると思います。その意味において、受講の先生方は自分の職責の重さを自覚し、職務に徹しておられる方々であると確信しています。嬉しいことにはほとんどの先生が「研修を受けてよかった。実践に生かしたい」「今までは食わず嫌いで、自分の血肉となることに気づかなかった」など、所員にとっては何よりも有り難いお誉めのことばをいただいております。自画自賛であります。あえてご紹介させていただきます。

ところで、昨年国立教育研究所が、全国56の教育機関を通じて調査した「学習指導・進路指導の改善に関する調査」の結果が本年5月に発表されました。その中に「教師が共感する教師のタイプは」という質問がありました。すなわ

ち、同僚として一緒に働くとしたら、どのようなタイプに共感をもてるかというものです。その結果は、小・中・高の校種及び年代別、性別を問わず「教科書や指導書等をよく調べ、指導法を工夫して授業に熱心な教師」、次に「学究的で研究報告もあり、自ら学ぶ姿を子どもに見せている教師」という2つのタイプが断然上位を占めていました。やはり、教師が共感する教師のタイプというのは、この2つに共通する「教師として常に自らの研鑽にはげみ、それを通して生き生きとした教育実践に取り組む教師像」であります。

目ざましい社会の進歩発展に教育もまた無縁ではありません。教育の指導内容、指導技術など日に日に進歩向上していきます。その中において、教師が、ある一時期の知識と経験だけをたよりとして子供の教育にあたっては、師弟ともに不幸であります。私たちは、たえず自己研鑽につとめていて、はじめて自信をもって子どもの前に立つことができますし、努力の裏打ちがあってこそ心のふれ合う全人的教育を生み出すことができると思います。

「経師は遇い易く、人師は遇い難し」といわれます。このことばを思い出すとき、私自身、教師生活の過去に悔みがなかったか、生徒をなげかせはしなかったかと、自戒をこめてしみじみ考えています。

昭和60年度 佐賀県教育センター

研究発表会報告

本年度の研究発表会は、去る5月15日当センターで開催された。

開会式では、前年度の「教育実践・研究記録」入選者5名の表彰のあと、県教育長、当センター所長のあいさつがあり、続いて研究発表に移った。

【全体研究発表】は「この子らとのかかわりを求めて」という題で、人間と人間との交流にみられる陽性と陰性のふれあい・心のふれあい・ハダのふれあいなどをするときの設問のあり方について、当センターの森崎寛研究員が発表した。

【分科会発表】は「教育実践・研究記録」の入選者と当センター所員がそれぞれの分野で研究の成果を発表した。

①教育実践・研究記録入選者の発表

- (小国)意欲をもって自ら取材し、構想していく子どもを育てる指導

(本庄小・築山正純教諭)

- (小国)生き生きと文章表現をしたり、話をしたりすることができる子どもをめざして

(嘉瀬小・権藤順子教諭)

- (学校経営)一人ひとりの豊かな人間性を育てる教育実践——鳩グループによるたてわりそうじの指導(勸興小・西田路子教諭)

- (中理)イオンの移動についての一考察

(城北中・森潤一郎教諭)

- (特活)自発性の開発と人間的交流を深める生徒活動をめざして(大川中・森哲也教諭)

②所員発表

- (小社・中社)地理的学習における読図能力を高める指導のあり方——地図帳を生かした学習を中心に(2年次)

- (小算・中数)個の学習を成立させる学習システムの工夫——一斉・グループ・個別学習システムについて(図形領域)

- (中英)読解力をつけるリーディング指導のあり方について——音読・黙読・内容理解とその評価について

- (生物)教育センター周辺における野外観察実習地の設定—河川敷植物・社寺林を中心に

- (教育工学)学習効果を高めるビデオ教材製作の改善と視点——(高校理科I)ビデオ教材の評価を通して

- (地学)県内各地の自然観察ルートの調査・設置(2年次)

- (高校国・社・数・理・英の五教科)高等学校新教育課程の実践と課題——高校1年次における学習内容と指導計画

以上が分科会での発表であるが、詳しくは各学校に配布している「教育実践・研究記録集No.6」及び「佐賀県教育センター研究紀要第9集」に掲載されている。

【展示・演示】

- (生物)アフリカツメガエルの成体・幼生・血流の様子、土壌動物(ダニ)及び花粉の電子顕微鏡写真、ラプラタリング貝

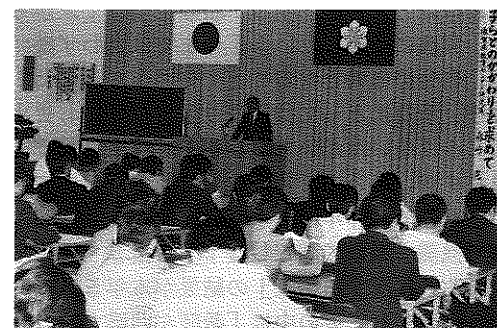
- (地学)県内の主な岩石、落下中のスカイラブ最後の様子

- (化学)お天気ネコ、ナイロンの合成、コーヒーマグ瓶を利用した電解装置、電解質水溶液の電気伝導性、その他

- (物理)大型水レンズ、メモリー付きデジタルカウンター、デジタルカウンターI/Oボード、(マイコン用)放電記録タイマー

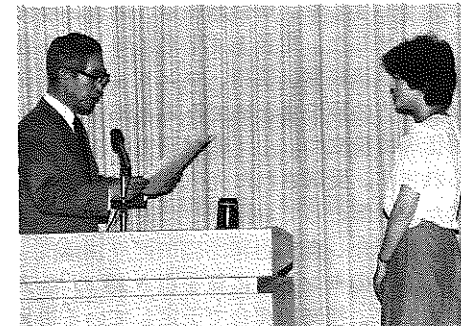
- (情報処理教育)数値制御(NC)工作機械による家紋、校章等の作品展示と実演

なお、今年度の参加者数は、小学校関係50人、中学校29人、県立高校91人、私立高校9人、その他23人、計202人で、中学校の参加者が少なかった。



森崎研究員の発表

教育実践・研究記録入選者の声



教育実践・研究記録入選者の表彰

意欲をもって取材し、文章を構成していく子どもを育てる指導

佐賀市立本庄小学校

教諭 築山正純

教育研究は、教育問題を解決するために、私たちに課せられたものとわかっていてもいやなものである。それは研究を進める過程でかならず壁におつかり、見通しの立たない状況に追い込まれるからである。私の場合も、子どもに実践してもうまくいかないことがたくさんあった。もっと意欲を喚起するにはどうするか、その指導過程は……。暗中模索であった。もう投げ出したかった。しかし、1つが解決されると不思議に他の問題も解決されていく。子どもたちが以前よりいくらかでも意欲をもって書くようになった時のうれしさは格別であった。このような経験が次の教育研究への意欲になればと思っている。

生き生きと文章表現をしたり、話をしたりすることができる子どもをめざして

佐賀市立嘉瀬小学校

教諭 権藤順子

表現に対する抵抗をなくするには表現の機会を多く与え習慣づけることだと思い、お話しレーあのお日記、本読みゲームなど興味をひく素材を与え生き生きと活動できるよう努めました。

特に、親・子・教師の三位一体で行ったあのお日記では心の交流まで図れ、グループで作った紙芝居ではお互いの助言など表現に対する意欲がみられました。これからも自分の個性を生かし想像力を働かせて楽しく書いたり話したりするための素材をみつけていきたいと思っています。

一人ひとりの豊かな人間性を育てる教育実践——鳩グループによるたてわりそうじの指導——佐賀市立勸興小学校

教諭 西田路子

「思った通りに書きなさい」と、簡単に子どもに指示しますのに、自分が書く立場になると、その難しいこと。鉛筆が進みません。卒論以来論文など避けて通った十数年間のつけが、どっと回ってきたような感じで、苦勞しました。

さて、縦割そうじも三年目。全職員、全児童で、よりよい鳩グループの育成にとりくんでいます。「問題が生ずるのは当然、とにかく、やってみよう」とスタートしたときの心は、今も勸興小学校の教育理念として続いています。教育は、まず実践だと思います。

意外性の再発見

佐賀市立城北中学校

教諭 森潤一郎

同じテーマでも、時間を経て見直してみると当初、思いもかけないところから新しいアイデアが生まれ、我ながら驚くことがある。

イオンの移動で使った固まった寒天は、水を加え加熱すると溶け、何度も利用できることがわかった。また、イオンの移動を視覚的にとらえさせることに観点を置いて考えていたが、電極反応の観点から考察してもおもしろい結果が得られた。観点を変えて自然現象を考察してみると新しい世界が開けてくる。自然現象のふしぎさに今さらながら驚いている。

自発性の開発と人間的交流を深める生徒活動をめざして

伊万里市立大川中学校

教諭 森哲也

学校は生徒から「自ら考え、正しく判断し、自ら行動する」チャンスを奪いとっていないか。これが大川中の実践の出発点でした。教師と生徒との試行錯誤の連続。そういう中から、めざす方向が次第に明らかになってきたわけです。

教師が日常的な教育の場で、なにげなく行っていることに落とし穴はないか。「生徒をどうするか」ではなく、「教師が生徒をどう見るか」、「教師がどのように変わるか」という姿勢を大切にして、さらに、実践を深めていきたい。

研修講座

講座実施状況と受講者の声

本年度実施予定102の講座も8月31日までに、63の講座が完了しました。研修講座は、講義、研究発表、研究授業、演習、実験、野外研修など多様な方法で行われました。定員1,477名に申し込み者1,811名、受講者1,721名でした。受講希望は中学校道徳、中学校学級経営、芸術、コンピュータ関係の基礎、教育相談関係に集中していたようです。受講された先生方の声をまとめてみると95%が「よかった。」と答えられ、その理由として、「明日からの学習指導に役立つ。」「教材研究の視点がはっきりした。」「自己反省の機会になった。」を挙げておられます。受講された先生方の中から4名の先生にお願いして受講の感想を寄せていただきました。また、講師としてお招きした佐賀大学の国次太郎先生に「受講者への提言」を寄稿していただきました。ご紹介します。

「小学校国語科講座」を受講して

佐賀市立兵庫小学校教諭 福田由美子

経験だけは十年以上になりましたが知らないことが多く、その上、せっぱ詰まった場に自分を追いこまないとしようとしないう性格です。で、年に二、三回受講させていただいています。

今回も又、演習からです。グループの皆さんと一緒に、不得手な説明文に取り組みました。心の中で平凡で面白くない面白くないとつぶやきながらです。ところが、視点を変えると面白くなることを示唆していただき懸命に討議しながら指導案ができていきます。おかしなもので、難しい程自分が勉強したような得したような気分になります。3日目は講義でした。午前中はめったに聞けない詩の指導をしていただき、午後は青木先生のご指導でした。「ことばを通して、その人の人格が分かる。」と話していただきながら、教師としての私のことば、母親としての自分のことばの違いに反省させられたことでした。



楽しいアンサンブルの練習

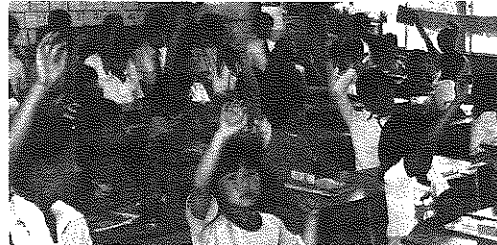
「小学校算数科(低学年量と測定)講座」を受講して 武雄市立武雄小学校教諭 土橋 松江

2学期に授業研究会を控えて、同領域の講座を見つけ受講した。

ひさしぶりのセンターに気を引き締めて入館。演習では、授業研究会で予定している単元あたり、古賀先生の指導の下に指導案の作成。単元の構成や教材の解釈では、これまで気付かずに見落していた点などを指導していただき、現場と直結した講座に感謝した。

松村先生の講義では、豊かな経験とするどい洞察力に基づいた話があった。

「行を読むだけでなく行間を読み、さらに行を越えて読むことが大切です。」「プロの教師とは、ゆさぶりをかけられるようになることです。よ。」との言葉に、全教科に共通する精神を学んだ。日ごろの授業を振り返ると、行を読むだけに終わっていたり、行間を読む段階で満足したりだった。「行を越えて読む教師」をめざし今後さらに研修していきたい。



作成した指導案による研究授業

「中学校数学科講座」を受講して

武雄市立武雄中学校教諭 草場 宗男

今回の受講で印象に残ったことの1つに、現代の科学技術のすばらしさがありました。S-P表の作成は数時間を要します。ところが、センターのコンピューターを使ってすれば数分間で作成され、さらに、どの生徒に注意を要するのか、どの問題に注意を要するのかまでが処理されるのです。学校現場にこそ、このような機械が導入され、教育に生かされなければならない

いと思いました。また、黒木先生の豊富な教育実践を通しての講話は、時間を忘れさせるものがありました。「数学を通じて人間をつくる気持ち」が大切である」と結ばれた言葉は、自分自身の数学教育のあり方を反省させられました。

大学の先生や所員の方の理論的な講義、現場の先生の実践研究の発表、さらに受講者の演習と、いずれもすばらしい内容でした。快適な施設、設備の中での研修は実りの多いもので、ぜひ、今後の教育活動に生かしたいと思います。

「特殊教育基礎講座」を受講して

川副町立西川副小学校教諭 増岡 一宏

教師になって、今年初めて「特殊学級」を担当し、無我夢中で一学期間やってきました。しかし、こんなことをやっていたいいものだろうか、こんなやり方でいいものだろうかという迷いながら不安な毎日をすごしていました。

そういった中で、この講座を受講しました。この講座を受けて、勇気づけられたり、反省させられたり、新しいことを学んだりしました。

受講者への提言

「基礎・基本」も見直そう

佐賀大学教育学部 教授 国次 太郎



算数・数学教育の現代化運動が花やかであったころ、その影響を受けた学習指導要領が実施されると、児童・生徒の計算力の低下、勉強についていけない落ちこぼれがこの現代化のせいで起ったという強い批判を受けました。実際には、計算力の低下も起こっていなかったし、算数・数学よりも嫌いな子の多い教科が別にあったのですが、基礎・基本の重視を声高かに叫ぶ世論に圧倒され、学習指導要領の改訂にともなう現代化は消滅したように見えました。

最近、電卓・コンピューターを学校・教室に持ち込もうとする動きが活発になったように思われます。若者の世界ではゲームを中心にパーソナル・コンピューターの利用が大変ひろがっています。通産省のある審議会もコンピューターの利用を学校で指導すべきであると答申を出したそうです。算数・数学教育の研究会でも、電卓・コンピューターを利用した算数・数学の指導についての研究発表が、我国では特に最近増加しているように思われます。

ほとんどの講師の先生方から、障害児教育において、生活学習が不足し教科学習へ傾倒しているという指摘がありました。これには思いあたる節があり、今の実践を問いなおす必要性を感じました。障害児にとって「生きる力」とは何か、それをどう育てていくかということを今こそ真剣に考えなければならないことを痛感しました。

障害児教育をとりまく現状はきびしいものがありますが、この講座を糧にがんばっていきたいと思っております。



和紙染め用の型彫り作り

欧米諸国では、電卓・コンピューターは以前から積極的に学校に導入されていて、普及率も高く、その利用についても数多くの研究発表や報告があります。高度な情報化社会で、電卓・コンピューターを大量に生産し、普及して、なお、学校の算数・数学ではほとんど電卓・コンピューターを利用していないということで、我国は例外的であるといつてよいでしょう。

電卓・コンピューターを利用した算数・数学教育のあり方を考えることは現代化運動の大きな柱の一つでした。歴史はめぐり、電卓・コンピューターという現代化の一視点から、基礎・基本を見なおす時代になったと思います。

教師が指導方法の専門家であることは当然ですが、指導内容についても高い見識を持ってほしいものです。子どもたちの先生は、ロボットではなく、尊敬すべき方であり、教育の専門家なのですから、教えたことに責任があります。

算数・数学教育で我国は名誉ある孤立を守るべきでしょうか、外国をまねるべきでしょうか。

中学校数学科講座概要

昭和60年8月22日

私の数学教育

前宮崎市教育長 黒木 定 彌



【数学への志向】

私はもともと数学が好きだった。数学の教師になろうと決めたのは師範学校に入ってからである。1年生のとき、入部していたバスケット部の監督、加来一二三先生が「黒木、お前はえらいできとったぞ。あの証明はこんなふうにしたらいい。」とパスをしながらかえてくださった。それを聞きながらひそかに数学の教師になりたいと思ったものである。また、心理学の先生から数学の成績がいいことに目をつけていただいて、いろいろ指導をしていただいたりもした。こうした、先生方の一言一動作が私を数学へと志向させてくれたのである。

【数学中断】

卒業後、小学校教師として赴任した学校で最初の校内授業研究会があった。私より2歳上の女の先生が算数の授業をされた。私は算数に自信を持っているつもりであったが、その先生の授業を15分ばかり見ているうちに「おれは、あんなにできない。」と、指導に完全に自信をなくしてしまった。研究会の席で教頭から次の研究授業をすることになっている私に教材と教科を決めておくように言われた。本当なら算数と言うべきところであったが、それはできなかった。よく調べた後、万葉集の授業をすることにした。それから4か月の間、子どもにもその課をよく読んでおくように言い、自分は何回も呼んで暗記をするのに全精力を傾けた。このことは、今も数学を教えるのに役立っている。

【子どもたちのおどろき】

そんなことがあっても、算数を教えるのは楽しかった。6年生の教科書に「赤道の長さに1メートルたした長さで、赤道のまわりに輪を作ったとすると、どのくらいのすきまができるか。」という問題があった。生徒に聞いてみると「白墨の粉も通らないだろう。」という答えだった。そこで、コップのまわりに1メートルたした長さのひもでコップをかこませて、すきまを測らせた。15～6センチメートルぐらいのすきまができた。次にせんとくおけでやってみ

た。子どもの予想は否定的だったが、実際にやってみると前と同じ結果になった。さらに、運動場で半径5メートルの円をかいてやってみた。やっぱり、前の2つと同じ結果になった。これには生徒は驚いた。そこで地球のことを持ち出したがまだはっきりしないようだった。しかし、このような経験をもとにして16センチメートルのすきまができる根拠を説明した。また、「のびる木」の問題も楽しい学習ができる素材であった。この2つは子どもに大きな驚きを与えた素材だった。

【ホグベンの「百万人の数学」】

ちょうどその頃、「百万人の数学」というのを手に入れた。それには数学の歴史が具体的な事実をあげて書かれている。これを読んだとき、それぞれの数学が誕生するためにはどのような必要性があったのかよくわかった。上巻は今でも大切に持っている。

【新制中学—数学担当】

新制中学の教師になった私は、希望に燃えてはりきった。学力は落ちていたが勉強しようと中学1年生の心意気はたいしたものだった。私は、1週間に28時間の授業を受け持って楽しいばかりだった。それで、本当に勉強したい生徒を集めて始業前1時間ぐらい指導した。毎日した。方程式がわかるようになった者、因数分解ができる者、三角比がわかるようになる者、間接測量で放送局の鉄塔の高さを測る者、対数表を作った者が出た。この結果を九数教の県大会で自由研究として発表した。批判する人はいたが、この経験から、やらせたら中学1年生でもできるということがわかった。

【特殊学級の子が】

劣っている子を救わないとだめだと思っていた。校長にはたらきかけて、宮崎県で最初の特級学級の担任になった。男13人、女8人の学級であった。国語、数学、英語を教えたが、特に劣っているのは算数であった。励ましてやっていたうちに興味を持ってやれるようになった。夏休み自由研究発表会では因数分解を応用した

暗算の発表を2年生の子にさせた。発表のしかたは、同僚に $(a+b)(a-b)=a^2-b^2$ の型の数式を言ってもらって生徒が暗算で答えをいう形をとった。5か月前にはかけ算九九も言えなかった子が同僚の出す問題に即座に答えるので見ていた生徒がびっくりした。遅れた子だって順序正しくやれば立派にやれるということをしみじみ経験した。この中の1人が私の家の改築をしてくれた。

【再び小学校算数—子どもらのつまずきから】

再び小学校にいて勉強することになった。かけ算の九九がうまくいえない子がいた。六八はいえるが、八六がいえないのである。あるとき、その子の答案を見るとできていたのである。よく見ると鉛筆でうすく $8 \times 2 = 16$ 、 $16 + 16 = 16$ 、 $16 + 16 = 48$ としていた。大発見であった。 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3} = \frac{2}{5}$ とする子がいる。このことを考えているうちに $\frac{1}{2} > \frac{2}{5} > \frac{1}{3}$ に気がついた。また、5人で3俵ずつ運んだらという問題で 5×3 とした子がいた。わけを尋ねると1回めには5人で5俵運ぶことになるのでその3回分は 5×3 になると答えた。誤答の中には我々に目を開かせるものがある。だから、なぜそうしたかを考えてやらなくてはならない。

【校長宿題】

昭和44年、日南市立油津中学校の校長になった。4月に赴任したとき、教務主任が「数学を5時間にするか、英語を5時間にするか」で頭をいためていた。そこで、私は英語を5時間に数学を4時間にするようにした。その代わり私が毎日、ドリルの時間を受け持つことにした。月曜日から金曜日まで15分程度、土曜日は30分程度の問題をガリ版で印刷して渡し、翌朝集めて次の朝返すことにした。こうして数学の先生には105分の時間をうかせたことにして納得してもらい時間割の問題は解決した。それから遠足の日もその場に持って行って渡し、次の日には集め、採点して返した。わからない者は名前だけでもいいいに書かせて出させることにした。油津中時代の4年間、これを続けた。このことはいろんな効果をもたらした。まず、生徒の名前を覚えることができて、生徒と校長とのつながりができた。生徒の顔ばかりでなく生徒の学力までわかるようになった。プリントには、問題だけでなく3行ニュースを入れて親しみを持たせるようにもした。これは、宮崎中学にいてからも続けた。校長のこのよう

な考え方に職員が協力的だったことはありがたかった。中には励ましてくれる職員もいた。生徒もどんなに易しくても真面目にしてくれた。

【テスト問題から個人得点の予想】

統一テスト問題ができると数学担当に自分の受け持っている学級の名簿に個人の予想点を書いてもらった。私も6クラス分書いた。こうしてその結果を比較しあった。時には、テスト問題がわからないときもした。テストの採点によく目を通しておくことと予想はつく、テストの結果を一覧表にしておくところとどこが誤りやすいかがわかる。時にはその子呼んで指導することもあった。これは授業に生かすと指導法の改善につながると思う。

【かけこみ寺—ほんとうに分らない子に】

「理数」に退職後の数学教育の実践を書いているが、退職して間もなく近所の中学1年生が親子で来て「数学がどうしてもわからない。このままでは県立高校に合格できない。」と泣きつかれて始めた。1年の秋から来るようになり、その2学期には通知表の評定が3になった。1年の3学期には4になるはずだと言っていたら本人は信用していなかったが予想のとおりになった。2年の1学期は5になると暗示にかけたらその通りになった。3年まで5を続け、県立高等学校1年の今も来ている。印象に残っているのは、高校3年の現在も来ている子である。中学校卒業までは数学がきらいで勉強しなかったが、高校に入学した春休みに学校から出され宿題に困って「先生。お願いします。」と1人でやって来たのである。それから私と一对一の生活指導を含めた指導が始まった。数学がだんだんおもしろくなってきたようであった。それと同時に家での生活にも落ちつきがでてきたということである。彼は今も毎日来る。数学の勉強だけでなく、彼の得意な社会科の相手もしている。「数学かけこみ寺」は私の生きがいである。

(文責 古賀 資之)



——指導のチェックポイント——

— 高 校 国 語 —

授業展開の中における発問の工夫
—導入段階での発問を中心として—

はじめに

学習指導には、講義法・問答法・話し合い法とか、一斉指導・個別指導・班別指導とか、いろいろな方法・形態が考えられます。そのいずれをとるかは、深い・的確な作品研究と指導研究にかかわってきます。その中でも、特に「発問」を指導過程の中でどう生かしていくかの研究は国語科では大切であります。充実した発問によって、躍動的な学習活動が展開し、豊かな学習内容が定着していきます。そこで、「発問」の中でも特に重要な「導入発問」に焦点をしばって、その基本的な要点について考えてみます。

1. 国語科における発問の性格・意義

発問は授業の中で、どのように行われ、どのような機能を発揮するかということとは、

- ・目的（何のために行われるのか）
- ・内容（何を問うのか）
- ・形態（どのように問うのか）
- ・時期（学習過程のいつ問うのか）

によって違ってきます。発問の全般的に通じる性格・意義についての要点は、次の5項目にまとめることができます。

- (1) この授業によって、何を学びとるのかという学習のねらいを自覚させるもの
- (2) 発問の順序は、文章を解明する・文章を解きほぐす過程を示しているもの
- (3) 生徒を学習の中心へ導き、うながす性格をもっているもの
- (4) 生徒を考える世界に誘い、思考させるためのよびかけとなるもの
- (5) 生徒を奨励し、賞賛する意味が含まれているもの

したがって、これをふまえた発問によって、生徒を学習目標に向かわせ、授業の質を高めるように工夫することが必要です。その場合、特

に、発問のねらいが

- ・診断のための発問であるのか
- ・記憶のための発問であるのか
- ・思考のための発問であるのか
- ・判断のための発問であるのか

をはっきりさせ、発問の難易・指名のしかた・タイミング等を考慮して行うことが大切です。

2. 導入段階での発問

導入段階での発問は、教材に対する興味・関心を高め、学習意欲を盛り上げるものでなければなりません。その要点は、次の5項目にまとめることができます。

- (1) その文章と対決する構えを生徒に意識させるもの
- (2) 学習の目標を生徒に示唆するもの
- (3) 学習の足場固めになるもの
- (4) その文章に対する意識を自覚させるもの
- (5) 生徒の思考や感動に出発し、それをもとに学習が展開することを意識させるもの

したがって、導入発問は、難解なものを避け、全員が答えられる程度の記憶発問を主にして、それに興味をそそるような思考発問を加えながら、問題意識を呼び起こすように工夫することが必要です。

3. 導入段階での発問の具体例

導入発問の基本的な型の一例を挙げてみます。

＜教材文が説明的文章の場合＞

- ・題目に……とあるが、それがどうだというのか
- ・この文を読んで、どんなことがわかったか

という内容追求にかかわる発問と、さらにそれを補充するものとして

- ・この文を読んでいくのに、どういうことばに気が付いたらよいか
- ・段落でだいたいと思われることばはどれか。また、全体の文で、どこどこをおさえればこの文は読みとれるか

という文章解明の方法・順序を思考し、示唆する問いを發します。

＜教材文が文学的文章の場合＞

- ・私たちに、何を言いたくて作者はこの文を書いたのだろうか
- ・この文を読んで、もっとも感じさせられたことは何か

という内容読み取りの発問と、さらにそれを補充するものとして

- ・この文を読んでいくには、どういうことばをおさえていったらよいか
- ・どのように読み取っていけば、この文がいっそう深く読み味わえるか

という文学作品の読解鑑賞の技能・内容を示

— 小 学 校 理 科 —

野外の自然をどのように指導したらよいか

学習指導要領に示された指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱いの中に、「生物、天気、川、地層などについての指導に当っては、野外に出かけ、地域の自然に触れさせることを重視するとともに、自然の保護に関心をもちさせる必要がある。」と述べてある。これは自然の事象を対象とする理科学習における最も基本的な姿勢であり、自然に対する畏敬の念を養い、ゆたかな人間性を育てることをめざしていると考えられる。

そこで、野外観察学習をさせる場合に配慮すべきことの一端を述べてみたい。

1. 野外学習の効果

- ・自然の事象には、現地に行き全感覚をはたらかせて観察しなければ認識できないものがある。例えば、地層や川岸の様子などを現地に行き実際に確かめないと、気の遠くなるような自然の営みに気付いたり自然の偉大さを感じ取ったりすることはできないのである。
- ・観察・調査など、野外でなければ育てられない技能がある。例えば、川原の石の形や大きさ

を、思考させる問いを投げかけます。

こうした発問から、授業のいとうちを示し、拠点づくりをし、その後で、また問いを導き出し、中心へ中心へと導いていく。ここに、導入発問の重要な意義があると思われます。

おわりに

「問いは答えを規定する」といわれます。発問が生徒の思想を一定方向に限定し、精神活動の自由を奪うというのでしょうか。しかし、発問の機能を生かすも殺すも、これを取り扱う教師の心がけ（技術）によります。

発問が不的確であったり、過剰であったりしたら学習効果はあがりません。時には、問題点だけを示し、あとは生徒が自由に考え、ノートに書き、グループで確かめ合い、文章を読み返すなどの活動を見守ることも必要でしょう。

つまり、「問わない問い」というものを教師が自分のものにしていくとき、学習が本当に生徒のものとなっていく。

(教科係長 兵働 文雄)

色などは、まわりの自然条件と密接に関連があって、その場でなければ意味を失うものがある。

また、虫かごや水そうの中に飼育されている虫や魚を観察することと、きびしい自然環境条件の中で生活しているそれらを観察する場合との間に、子どもの自然認識に違ったものがあるだろう。

2. 指導計画をたてる時

- (1) 目的地の実情についての事前調査

野外には、子どもの興味をひくものがたくさんある。そのため、子どもをただ漫然と連れていっては、散漫な学習になってしまうことが多い。事前に現地へ行って、どの地点で、どのような内容を、どのような方法で観察させるか、といった指導の計画が必要である。

また、危険な場所や事物、交通の状況、便所、飲み水、集合同所なども調べて、安全に対する対策も考慮しておく必要がある。

- (2) 児童の実態を知っておくこと

野外の学習については、都市と農村で、また男女によって経験や興味の持ち方、知識などの

差が大きい。そこで、関心の度合いや、知識、危険に対する判断の未熟な子、集団での行動が困難な子など、児童の実態を把握しておいて指導に当たるべきだろう。

(3) 事前に訓練しておきたいこと

自分たちが集団で行動するときの規律を決めさせ、集団で行動する能力を身につけさせておくことは、安全管理面からも、学習の能率面からも大切なことである。例えば、集合や危険の注意、話を聞く隊形、人数の確認の約束ごとなど、ふだんの学級経営の中で身につけさせておきたい能力である。

3. 実際の指導にあたって

(1) 現地へ出かける前に事前指導を

野外の自然は、複雑な条件がからみ合っている。よほど明確な視点を持って見るのではなくては、問題を見つけることも、事実を発見することもむずかしい。のり多い現地学習にするために次のことについて十分指導しておこう。

- 現地へ行く目的は何か
- そこで観察すべきことがらは何か
- 観察や記録の方法
- 標本などの採集と保存の仕方
- 安全な行動の仕方
- 服装、持ちものなど

指導にあたっては、事前学習から現地学習、そして、まとめの学習にまで使えるような手引書を作ると便利である。この手引書には、上記の事柄についてのほかに、現地の案内図や観察の要点、現地で観察したことがらやスケッチなどが記入できるようにしておきたい。

事前調査したことをもとに説明をしたり児童に話し合いをさせたりして、子どもの意欲を喚起させると共に、現地で確かめる問題をはっきりつかませておくことが大切である。

(2) 現地での指導

現地についたら、観察地の全体が概観できるところに集合して、観察する個所、観察することがら、あるいは危険個所や行動の仕方などについて指示や注意を与えることになる。

はじめから最後まで「あれを見なさい。」「これはね……。」「とか「こうしなさい。」など、教師が欲ばりすぎて、一方的な説明や指示ばかりでは、子どもはうんざりしてしまう。

子どもたちだけで自由に探索・探究する時間を設けてやると、子どもは喜々として活動を開始し、予期せぬ発見や経験もするものである。

ただ、はじめて経験することについては、自

分たちだけで的確に観察することはむずかしい。他のことに注意がそれたり、見れども見えずということが起こったりする。例えば、地層の中に見られる化石の様子、風化しかけている地層の間から湧き出ている地下水。朽ちた古木の中で、じっと寒さに耐えて春を待っている小さな生きものたちの様子など、大切なポイントについては、教師が教えてやり、どの子にも確実に観察させておきたい。

記録は、各自のノートや手引書に、子どもが見つけた事実や、現象を目の前にしたときの驚きや素朴な疑問などを図や文章でのびのびと表現させたい。それが教室での学習を精彩あるものにするし、思考を深めるよいきっかけにもなるであろう。

ただ、ここで気をつけたいことは、現地へ出かけるのは、教室での学習を充実させるための資料あつめのためばかりでは決していないということである。五体・五感を働かせて自然にはたらきかける活動そのものに大きな意味があることを見落としてはならない。例えば、花を摘む。石を並べる。地層を掘る。流れる水に手を入れる。虫や魚を追っかけるなど、自然に体ごとぶつかる豊かな体験をさせてあげたい。そうすることで本物の自然認識がなされるわけであり、そういった体験が、現代っ子に最も欠落していることである。

(3) 事後指導と評価

現地で観察した事実や、現地で感じた素朴な疑問や考えを大切に、学習を深めたりまとめたりするわけであるが、どの子のどんな記録や発言でも、「現地へ行ったからわかったこと。」であれば、認め、賞賛してやるようにしたい。「野外観察に行ってよかった！」という充実感を持たせることが大切である。

評価については、現地での観察活動の様子や話し合いの様子をチェックしたり、また記録しているものをもとに自分の考えをまとめさせたり、感想を書かせたりして、その考えが現地で観察した事実に基づいているか、自分の考えを持って現地で観察したかなどを評価したい。

以上、野外学習指導をする場合の留意点について述べてきたが、教師自身が、日ごろ自然に対してどれだけ、興味や関心をいだき、まめに探究する気持ち・態度を持っているかということ、子どもをどのように見ぬき、その実態に立つ援助が行えるかということが大切なことではないだろうか。（理科係長 森戸 吉昭）

「子どもを生かす教育相談—子どもの見方・接し方—」の出版にあたって

研修二課 教育相談係

いじめ、登校拒否、暴力など青少年の行動が社会問題として大きな関心を集めています。当教育センターにおける教育相談の受理件数も開所以来6年間で約1,000件、個別相談の延べ人数も12,000人を超えています。

こうした状況のもとで現在の教師には、子どもや親への幅広い対応と強い指導力が求められているのです。しかし、現実には「子どもの行動をどう理解したらいいのか?」「子どもにどうかわったらいいいのか?」といった疑問や不安を訴えて来談される親や教師が最近多くなっています。そういう人達に手軽に利用していただける「手引書、があったらいいなあ!!」といった思いつきがヒントになって、先に研究紀要「教育相談ハンドブック」を発行しました。

本書は、この紀要を基盤に当センターの担当所員が、これまでの相談活動を通して得た経験を十分に生かして、誰にでもよくわかり、しかも実際に役に立つようにといった思いで加筆、訂正を加え「家庭での助言」のコーナーも設け執筆しました。また、問題児に対する個人的対応だけでなく、学級経営の中で十分活用できるように、そして、家庭においても十分活用できるようにといったことを配慮しました。

本書の構成は、問題行動を『しつけに関するもの』『非社会的な行動』『反社会的な行動』の三つに大別し、全体で32の項目を取り上げています。

『しつけに関する問題行動』では「勉強嫌いの子」「落ち着きのない子」「給食を嫌がる子」「テレビっ子」「友だちと遊べない子（集団行

多くの事例をもとに、子どもの問題行動を分析/

子どもを生かす教育相談

—子どもの見方・接し方—

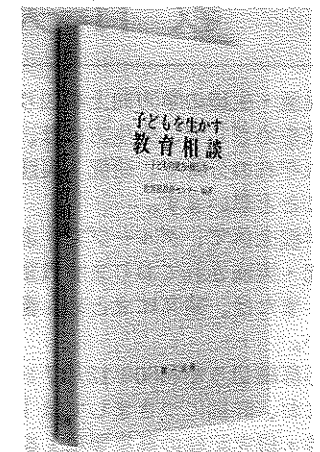
佐賀県教育センター 編著 / A5判・270頁・定価 1,800円(¥250円)

動のとれない子)」「けじめのない子・だらしない子」「がまんのできない子」「無気力な子」「引っ込み思案の子」「つげ口をする子」「ほめ方・しかり方」の11項目。

『非社会的問題行動』では「登校拒否」「神経質な子」「指しゃぶり・爪かみ」「場面緘黙の子」「どもりの子」「チック症」「夜尿・頻尿」「てんかんをもつ子」「家庭内暴力」の9項目。

『反社会的問題行動』では、「いじめ」「うそをつく子」「盗み(万引き)をする子」「規則(校則)違反を繰り返す子」「怠学の子」「喫煙」「夜遊び(深夜徘徊)・外泊」「家出」「薬物乱用」「無免許運転・暴走行為」「突っ張り—荒れる学校—」「性非行」の12項目を扱っています。

志岐常文教育長からは「……本書には、臨床体験から得た具体的・実践的対応の仕方が豊富に盛り込まれています。ハウツーものとして手軽に利用されることを意図しながら、原因や背景・心理的メカニズムなど、本質的なことは、しっかりとおさえられたものになっており、指導のめやすとして格好である……」と推せんのことばをいただいております。本書が、先生方の座右におかれて、日々の教育活動に御利用いただければ執筆者一同望外の喜びとするところです。



私のすすめる「一冊の本」

「教育改革宣言」 (教育開発研究所)

著者 M・J・アドラー 佐藤 三郎(訳)

本書は「総ての人に同じ目標」達成を目指す12ヶ年の基礎的学校教育が民主主義社会の発展にとって不可欠なものであることを説き、「知識の習得」「技能の育成」「理解力の拡大」の三本柱と、それぞれ三つの特徴的な学習様式を提唱している。

あまりに多様化しすぎたアメリカの教育に対する提言であろうが、我国の教育を考える際にも貴重なヒントであろう。

佐賀市立芙蓉小学校

教頭 七田 康隆

「日本の知恵、ヨーロッパの知恵」

(三笠書房) 著者 松原 久子

推薦の理由

ヨーロッパ人と日本人との思想、感性の違いが、両者の対比の上で述べられ、その対比により鮮明に両者の姿が読者に読みとれる。

貿易摩擦等の問題を考える上にも、広い視点を与えてくれると思う。教師の視野が狭いといわれているが、より広い考え方や物の見方を持つため、この一冊の本は十分に、答を用意してくれているように思える。

有明町立有明東小学校

教頭 辻 宏達

「教壇上の文学者」 (蒼丘書林)

著者 山住 正己

文学者の豊かな感性は、教育現場でいかに発露したか。——直接の教え子達が回顧して語り綴るその教師像は「教育」に関わろうとする人々に多大の示唆を投げかける。島崎藤村はおだやかな英語教師、騒ぐ生徒を叱らず機知に富んだ諷刺をもって戒めた。石川啄木・宮澤賢治・下村湖人など、四人の文学者の個性ある教師の体臭がにおってくる魅力に満ちた本である。

鹿島市立西部中学校

教頭 石橋源司郎

「われ判事の職にあり」 (文芸春秋)

著者 山形 道文

推薦の理由

昭和22年11月4日「山口判事ヤミ米を拒否して餓死」のニュースは日本中を驚愕させた。裁判官の良心に殉じた壮絶な死は多くの人の心を揺さぶった。佐賀県の米どころ、白石平野のど真中で生まれ育った青年判事が食うものを食わず餓死したのであるから皮肉な話である。この一冊の本を通して、もう一度人間の生き方を問い直してみても無駄ではあるまい。

佐賀県立伊万里高等学校

教頭 島山 忠郎

昭和60年度

教育実践・研究記録募集

児童・生徒の学力向上を図り、豊かな人格の育成をめざして、先生方には、日夜学校教育のそれぞれの分野で、研究・実践を重ねておられることと思います。

学校全体で、グループで、あるいは個人で、研究・実践されております貴重な記録を整理し、または、論文にまとめ、奮って御応募ください。

応募締切り昭和60年12月7日(土)

なお、詳細につきましては「昭和60年度教育実践・研究記録の募集要項」を各学校に配布し

ておりますので、それを御覧ください。

※ 問い合わせ先

佐賀県教育センター研修一課教科係

強いからだと豊かな心

教師の熱意で育てよう